

ならスポーツフェスティバル21

第59回 奈良県 県民体育大会
平成20年 7月6日(日)
会場：奈良県立橿原公苑弓道場
奈良県橿原庭球場遠的射場
参加人数：89名

初夏の晴天の下、県民体育大会が開催されました。開会式では、竹村副会長より「本日はとても良い天気になりましたが、体調に気を付けて各地区の代表として頑張ってください。」とお言葉を頂き、矢渡し(射手：竹村副会長・介添え：深田副会長・新司副会長)の後大会が行われました。

【市郡対抗戦】

男子団体

- 1位：生駒郡 (乾光孝・平木一史・蔵地隆文)
2位：橿原市 (綿松昭寛・松田修・前角博)
3位：奈良市 (矢野有吾・中井達男・北村良文)

女子団体

- 1位：橿原市 (東中千佳・小野温美・榎田容子)
2位：生駒市 (山口愉佳子・大町幸子・早山和子)
3位：桜井市 (谷口昌美・吉野真由美・吉岡瑞紀)

男子個人

- 1位：蔵地隆文 2位：竹村邦夫 3位：綿松昭寛

女子個人

- 1位：山口愉佳子 2位：西川由貴 3位：吉岡瑞紀

【公開競技】

一般男子

- 1位：瀧井浩一郎 2位：酒井孝典 3位：水野之雄

一般女子

- 1位：林美佳 2位：林秀子 3位：辻成美

熟年

- 1位：西川義春 2位：井阪清 3位：中埜広樹

閉会式では、井倉相談役より「県体は、59回目を迎え昔より奈良県の弓引きは県体の時期が来たら、さあ行くぞと拳って集まったものです。今年も多くの参加者があり嬉しく思います。来年も大勢の参加を期待します。」とお言葉を頂き大会は終了しました。

《競技部より》

県体当日は酷暑の中、参加者皆様の御協力の下スムーズに運営をすることが出来ました。ありがとうございました。一部競技において、大会当日に実施要綱の変更があり参加者の皆様に混乱が生じてしまいました。誠に申し訳ありませんでした。反省点として、来年度への課題としたいと思います。

(競技部 松田 仁)

平成20年度 審査員講習会

梅雨入り間近の6月1日、橿原公苑弓道場で審査員講習会を実施しました。朝からの称号者大会に引き続き参加する者、講習会にのみ出席する者等39名の参加がありました。

内容は、

- 1 地連審査基準、審査の運営に関する規定を便覧に沿って確認。
- 2 昨年度の審査から
・級位及び中学生の基準について
・「失」への対応
- 3 運営主任の役割確認・・・的確な指示を
・「損」の指示を待つ受審者
・位置のずれ
・立つタイミング
・矢の引き込みについて
- 4 替弦を準備しない受審者がいる・・・指導者が指導すべき基本的事項である。
- 5 地連審査受審者数の推移

で行いました。

有資格者の皆さんで一度も参加いただけない方がおられます。地連審査員も有資格者の役割の一つと考えます。ご多忙とは存じますが、講習会に参加し、審査員として協力いただきますようお願いいたします。(審査部)

第55回全日本勤労者弓道選手権大会

6/7,8に勤労者大会が新潟市新津地域学園弓道場にて行われ、シャープ支部が奈良県代表として2チーム出場させていただきました。

[結果] 2チームとも一次予選で予選落ちとなりました。一次予選 12射(各自4射) 7中以上通過

Aチーム (伊坂隆行 藤本聡郎 酒井孝典) 3中/12射

Bチーム (片岡直樹 三浦 哲 尾崎弘和) 3中/12射

この大会は、国体のリハーサル大会でもあり、地元のかたの国体にかかる意気込みが伝わってくる中で弓を引かせてもらいました。全く結果を残せず力不足を実感いたしました。

来年2月の団体選手権に向けて出直します。



[写真] 国体マスコットのとっぴー(左)ときっぴー(右)

(酒井孝典)

速報

全日本男女弓道選手権大会

近畿地区代表選考会

7月20日(日)京都武道センターにて開催され、奈良県からは阪中 計夫、森 昌彦、岡本 薫子、早山 和子の4名が出場しましたが、惜しくも全員予選敗退となりました。

第20回奈良県教職員弓道大会

7月5日(土)に、平成20年度 第20回奈良県教職員弓道大会を、奈良県立橿原公苑弓道場で実施しました。競技は近的10射で行い、暑い中でしたが、参加者は一射一射に集中して真剣に行射し、実りのある大会とすることができました。大会開催にあたり、ご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。来年度もよろしくお願ひ申し上げます。

【競技結果】

1位	松本 高佳(法隆寺国際高校)	4中
	明崎 静代(オープン参加)	4中
2位	山本 弥素典(磯城野高校)	3中
	(報告者 松本 高佳)	



眞鍋 征史さんが5月の東海・臨時中央審査(岐阜)で六段に合格されました。

橿原市中学校総合体育大会(弓道の部)

開催日: 6月14日(土)
場所: 橿原市立橿原中学校

【団体戦】

近的男子

- 1位 白檀A(階戸尊・山本雅也・兼近深宇)
- 2位 檀原B(上田慎也・福辻真哉・光岡俊樹)
- 3位 大成A(野元勇真・辻龍也・小林亮仁)

近的女子

- 1位 大成A(樋岡奈々・松田妙子・小笹夏海)
- 2位 白檀A(中井香南・荒木咲江・中町綾)
- 3位 檀原C(皿井美紗・杉本真莉・仁田奈名美)

遠的男子

- 1位 白檀A(階戸尊・山本雅也・兼近深宇)
- 2位 八木A(堀江裕貴・飯田大智・長尾怜哉)
- 3位 大成A(野元勇真・辻龍也・小林亮仁)

遠的女子

- 1位 八木B(津島歩実・木田有紀・山本由美)
- 2位 大成A(樋岡奈々・松田妙子・小笹夏海)
- 3位 白檀A(中井香南・荒木咲江・中町綾)

【個人戦】

近的男子

- ①山本雅也(白檀)②階戸尊(白檀)③片岡純弥(八木)

近的女子

- ①荒木咲江(白檀)②中井香南(白檀)③林花苗(八木)

遠的男子

- ①堀江裕貴(八木)②階戸尊(白檀)③宮本光瑠(檀原)

遠的女子

- ①荒木咲江(白檀)②赤下部奈月(檀原)③山本由美(八木)



奈良支部 編

道場も今年で創立30周年を迎えた。殺風景だった風景も植樹が大きく育ち正月の初射会を終えるともう梅の花がしおらしく咲き零れ、春は桜花爛漫見事な彩りと共に華やかな雰囲気安土に醸し出す「弓身持て楽し矢場にとぞなり」落花の舞に一人舞台を想う。5月梅の実もたわわと生り(いつの間にか無くなるが)仰ぎ見れば晴れた夏空に満月の光を浴びて立禅気分爽快、秋に紅葉、時に迷い鹿が矢道に草を啄ばむ。厳しい冬にちらつく小雪見て身を引き締まるを覚え、早や大晦日、東大寺の響き渡る荘厳な鐘の音を気沈丹田の合図とばかりに寒稽古、春夏秋冬これほど情緒溢れる9人立ち道場は古都奈良ではの事ももしれない。

恵まれた環境での弓修練、現在の協会登録会員数は163名、(男子76名、女子87名)四季の節目に一般募集の初心者教室を加えると更に多い、各期20名毎週土曜日に「挨拶から始まり徒手へと段階を踏んでの基礎3ヶ月」終了時には大的に向かうまでになりその後は本人次第で正会員、中りに一喜一憂する人・弓の奥を追求する人、若い人そうでない人男女入り乱れての弓仲間、真に気楽であり気遣うこともない、これも時代かなあ。

(次ページに続く)



(続き)

毎週土曜日の午後、生駒市弓道協会の人たちも集まり多分に過密気味ながら欧米人も時々来場、至極和やかな雰囲気でもある。「弓道に教えたがり屋が多い」と、ご多分に漏れず多い。新司会長から練習マナーについての注意、「初心者教室の世話を5段位が担当、六段位は指導のアドバイスを」と決められた。練習時の「頼まない助言?は迷惑」、別に初心者教室を終了した人、夜に来場不可能な人を対象に毎週午後「火曜日教室」があり射技・所作等を研究指導、開講より13年間担当早いものだ。



貸切日を除く道場は実に気楽、有料ながら利用者が多い。巻き藁道場に等身大の特大姿見、5連の巻き藁を備え矢道に雨よけの屋根と通路の建屋は有り難い。と言えば道場内での着替えも更衣室が新設され重宝の至り。これほど完備された道場で修練できるとは弓冥利に尽きる。先人に感謝、欲を言うと射場で喧嘩かな。 弓道万歳!

道場経緯

- 昭和49年09月28日 奈良市中央武道場竣工
- 昭和53年03月30日 奈良市弓道場竣工
- 昭和53年10月08日 初心者「弓道教室」開講
- 昭和58年04月 奈良市弓道協会設立(会員41名)
- 当時の教室生(年間728名)登録人員45名/年
- 平成7年 巻き藁道場・更衣室完成(ロッカー男女168個)
- ” ” 矢取道通路完成

(記 宮本 修)

訂正のお知らせ:

前6月号の記事のうち、高校インターハイ県予選、男子団体優勝の檀原高校的中数は68でなく、71中が正しく、またねりんピック代表選手の赤松順次さん(郡山)の所属が記載漏れでした。それぞれ担当部門より訂正の連絡がありましたのでお知らせしておきます。(編集子)

歳時記

八月 扇

夏の暮らしに扇子はたいへん便利なものですが、歴史的に見ると季節とは関係なく、日々の暮らしに用いられていました。扇はしゃく(竹かんむりに下へ勿)から転じたといわれています。しゃくはかつては礼服に添えて手に持つものでしたが、今日では神官が用いております。



平安時代に、檜(ひのき)や杉の薄板を糸でとじ合わせた板扇が創生されましたが、今日は檜扇に代表されています。橋数(板数)は八枚を一単位にして、正式には三重ね、五重ねなどがありますが、二十四をきらって二十五枚、四十をきらい三十九枚としています。

檜扇は五色の打ち紐で結びましたが、身分によって定めがありました。摺畳扇(しゅうじょうおうぎ)として折りたたむ扇ができました。現在の竹の骨に地紙を張ったものです。(中略)骨の数は時代とともに次第に増加していきます。平安末期、朝鮮半島から中国に輸出され遠くヨーロッパまで広がりました。一方では中国で工夫された、紙を二重に貼り合わせて内に骨をさし入れる方法が逆輸入され、その為に薄い骨を使用するようになりました。



親骨の先が外側に向かって反る扇なども工夫されました。直衣(のうし)に持ち添える中啓などもこの類です。



女子は五つ衣のときは桧扇で、小袖の時は中啓の親骨の反りを少し閉じた形のぼんぼりを持ちます。男子束帯のときはしゃく、直衣には中啓、小素襖の暗が鎌倉扇などという定めがありました。扇子の使用は、暑さを防ぎ風を送るというよりも、他の用途のほうが強いように思われます。例えば口上の覚書にするとか、手渡しする事を遠慮して扇子に載せてすすめるためにも使われますし、履物を直す場合にも用いられます。このように、自分をあおぐということに扇子が使われることは、あまりありませんでした。奈良時代に扇といえば今日の団扇(うちわ)を意味しました。中国の唐の時代に輸入されましたが、現在の団扇は徳川も下って元禄の頃から流行したものです。扇子と同様、自分を扇ぐための物ではなく、客へのもてなしに使いました。

「小笠原流マナー」著者小笠原清信 グラフ社発行より

中塾狛大学藤原孝澄(中塾広樹)